

尊厳死考える契機に

交通事故で全身まひになった妻を亡くなるまで8年間看病した富山市磯部町の松尾幸郎さん(78)が、米国人作家、リチャード・コチーさんの尊厳死をテーマにした英語の著書「安らかな死を探し求めて」を日本語に翻訳し、自費出版した。終末期の生死の選択権を求

めて闘った世界各地の医師や弁護士らを紹介している。松尾さんは「死は誰にでも訪れる。簡単に答えが出せるものではないが、尊厳ある死について考えるきっかけにしてほしい」と話す。

(文化部・河波まり)

自費出版「妻にささげらるる」

当時62歳だった妻の卷子さんは2006年夏、富山市内で車を1人で運転中、センターラインを越えてきた対向車と正面衝突し、けがで全身まひとなった。目と耳は正常で意識もはっきりしていたが、動かせるのはまぶただけで、話すこともできない。

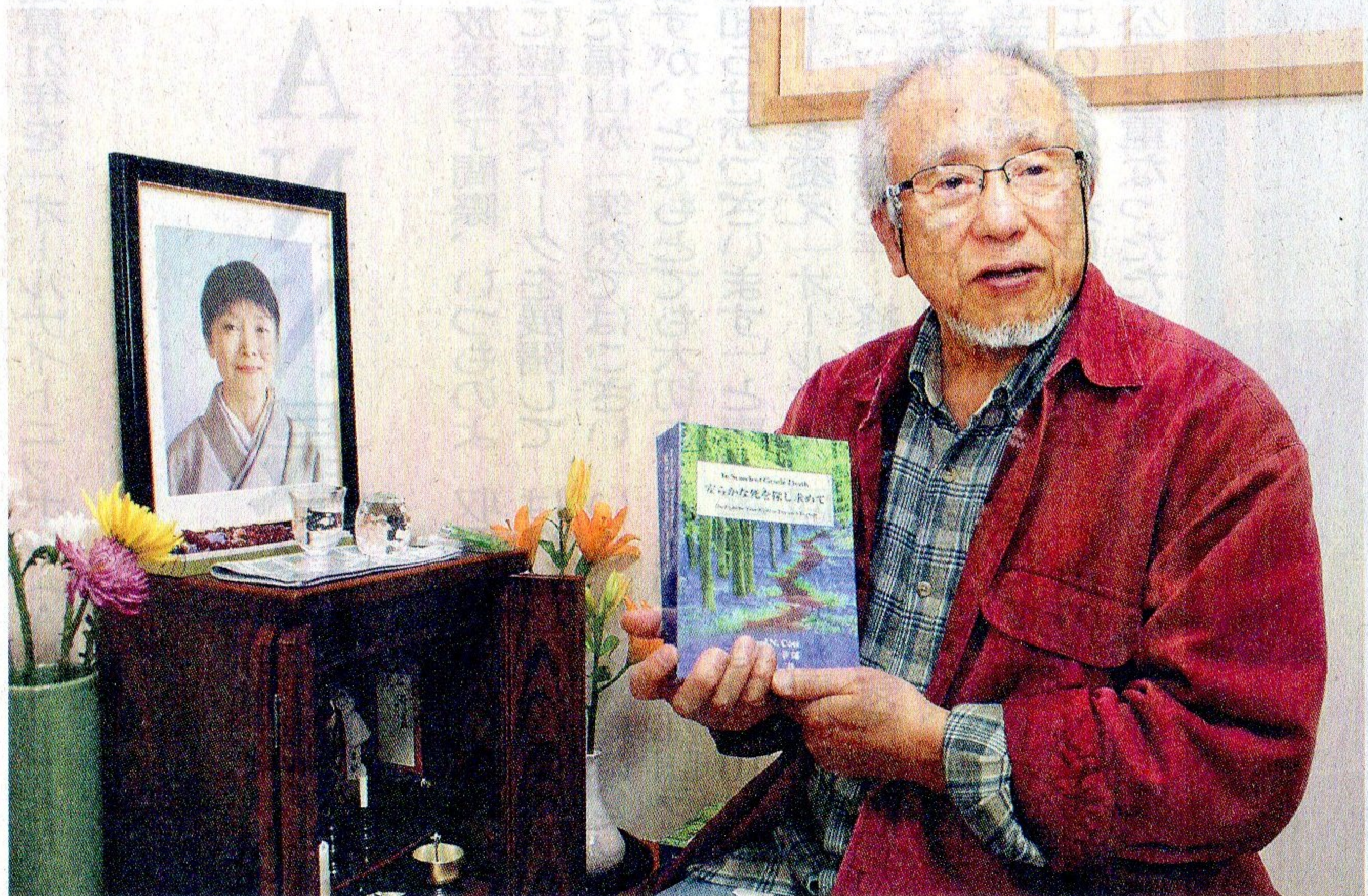
事故から2年9カ月後、松尾さんは会話補助器を使い、卷子さんのまばたきの動きを基に言葉を引き出すことができた。「あいしています」「ありがとう」といった愛情の言葉とともに、何度も「しにたいの」「ご了承ください」という言葉が

つづられた。「延命装置を付けて生かされている状態を、本人は望んでいないのではないかと」シレンマに陥った。卷子さんはことし5月に息を引き取った。コチーさんには、12年にスィスで開かれた世界尊厳死大会の会場で初めて会った。商社の米国法人社長を10年間勤め、英語が堪能な松尾さんは「安らかな死を探し求めて」を原書で読んだ。終末期の自己決定権の尊重を求めて活動した人々とその歴史が描かれていた。

第5章「私の命は誰のもの？」には、ALS(筋萎縮性側索硬化症)を患ったカナダ人女性が登場する。「読みながら卷子の姿と重なった。似たような苦痛の中にいる人たちが取り組んできたことを日本の人にも知ってほしい」と翻訳を決意。約1年半、ほぼ毎日、訳を続けた。

欧米の一部には、終末期の生き方に選択肢を認める法律がある。松尾さんは「一人一人が考え、今こそ議論しないといけない」と話している。

富山の松尾さん 米作家著書を翻訳



卷子さんの遺影の前に、翻訳した本を持ち「妻にささげたい」と話す松尾さん

富山市磯部町の自宅

A5判、738ページ。デザインエッグ刊、7992円。ネット書店「アマゾン」で注文できる。